忠こそ巻における和歌表現の方法

―『古今和歌六帖』との関わりを中心に―

内藤英子

キーワード：浅茅　葎　蓬　菅原伏見の里　ないがしろ

はじめに

『うつほ物語』の忠こそ巻は、独立性の高い短編物語ではあるが、長編「俊蔭系の物語との結びつきはきわめて緊密」であり[1]、特に俊蔭巻と対照性がある[2]。忠こそ巻の一条北の方物語は、一条北の方の「恥」と橘千蔭の「情け」により物語が展開するが[3]、本稿では、二人の和歌の贈答を中心に、忠こそ巻の和歌表現の方法について、『古今和歌六帖』（以下、『古今六帖』）との関わりを中心に考察する。『古今六帖』は『後撰集』成立以後から『拾遺集』成立以前の九八〇年代頃までに編纂されたと考えられる類題和歌集である。『古今六帖』の『源氏物語』への影響については、歌題単位での物語の影響、歌題内の歌の連なりが及ぼす影響などがみられる[4]。『うつほ物語』の引歌については、内侍のかみ巻について『古今六帖』との関連が指摘されている[5]。

まず、平安中期以後荒れた邸宅を表す歌語「浅茅」「葎」「蓬」が、忠こそ巻でそれぞれどのような意味を持つかを『古今六帖』第六帖「草」部の歌題との関わりから考察したい。次に、一条北の方の歌に詠まれた「菅原伏見の里」の意味をその引歌から考える。さらに、忠こそ巻の和歌が歌語の連想によりゆるやかに連続して詠まれていることと、『古今六帖』の歌題内の歌の連なりがその和歌表現に影響していることを明らかにしたい。

一　「をかしき浅茅」

まず、忠こそ巻の冒頭で、夫である左大臣を亡くした一条北の方が、同じ時期に北の方を亡くした橘千蔭との結婚を望んで歌を贈る場面をみたい。

恥を捨てて言ひ出でむと思して、（中略）かく聞こえて奉りたまふ。

ⓐ「ここのみや浅茅繁きと思へどもまた葎生ほす宿もありとか

同じくは、同じ野にや思し召したまはぬ」とて、をかしき浅茅に御文さしたり。さて奉れたまふ。（中略）長き葎を折らせて、御返し、

ⓑ人はいさかれじとぞ思ふ頼め置きて露の消えにし宿の葎は

とて奉りたまふ。（①二一三・二一四頁）

一条北の方は、両親の一人娘でその遺産をすべて相続し、比類ない財宝の持ち主である。仏神への大願もかなわず、「恥を捨てて」一条北の方から千蔭に自分の思いを歌と手紙で伝えようとする。だが、元左大臣の妻という身分の高い一条北の方は、自らは行かず、亡き夫の乳母子ですぐれた容貌の女童のあやきに、豪華な衣装を着せて千蔭の家に行かせた。ⓐ歌は、夫をなくし自分の住む家だけ浅茅が繁り荒れていると思っていたが、同じように妻を亡くして葎が繁り荒れている家もあるとか聞いたと詠まれている。続いて、同じことなら、自分の家もあなたの家と同じように思ってもらえないかと書かれ、その手紙は「をかしき浅茅」に付けられていた。

まず、一条北の方のⓐ歌に詠まれ、手紙の付けられた「浅茅」が歌語としてどのような意味を持つかについて考えたい。「浅茅」は短い茅で、イネ科の多年草である。『古今六帖』には全体で二十一首あるが、第六帖の歌題「浅茅」には八首があり、その中の五首を次に示す。

①浅茅生の小野の篠原しのぶとも今は知らじな問ふ人なしに（人丸）（三八九八）

②山高み夕日隠れの浅茅原後見むためと標結はましを（三九〇一）

③思ふよりいかにせよとか秋風になびく浅茅の色ことになる（三九〇二）

④秋萩は咲きぬべからし我が宿の浅茅が花の色づく見れば（穂積王子）（三九〇四）

⑤真葛はふ小野の浅茅を心より人引かめやも我ならなくに（三九〇五）

①歌は、『古今集』恋一には、第四・五句「人知るらめや言ふ人なしに」とあり、「浅茅生の小野の篠原」は「しのぶ」を導く序詞で、①歌の歌意に「浅茅」自体の意味は影響しない。①歌は、私に恋をしているのかと尋ねる人（『古今集』であれば「伝える人」）もいないので、今は私の恋心を相手が知らないという意味で、一条北の方が自ら千蔭に恋心を伝えなければならないという状況と共通している。②歌は、『萬葉集』巻七（第二句「夕日隠りぬ」第四句「後見むために」）と『拾遺集』雑下（第

二句「夕日隠れぬ」第四句「後見むために」人麿）にもあり、『萬葉集』では譬喩歌で、「浅茅原」は思慕する若くて美しい女性によそえられている。歌意は相手の女性が若くて今回は逢えなかったが、後ほど逢うために、標縄をはって自分の所有を示しておけば他の男性が関係を持つ心配もなくてよかったのにと詠まれている。⑤歌も『萬葉集』巻十一にもあり、「小野の浅茅」には若い女性が喩えられ、他の男性に誘いをかけられはしないかと心配している歌である。③歌は『古今集』恋四にもあり、秋風になびく浅茅の色が変わるように相手が自分に飽きて心変わりする不安が詠まれている。この歌からは一条北の方が最後に千蔭に贈る歌に「秋風」が詠まれ、千蔭が「色が変わる」ことを詠んでいたことが連想される。④歌は『萬葉集』巻八秋の雑歌（第五句「散りぬる見れば」）にもあり、秋の景物の「秋萩」と「浅茅」が詠まれている例である。後述するが、④⑤歌は、忠こそ巻の一条北の方の最終詠に関係している。このように、『古今六帖』の歌題「浅茅」に連なる歌が、引歌とは言えないもののゆるやかに一条北の方の物語の展開に影響を与えている。

「あやき」という「めでたくかたちある童」は、②歌や⑤歌のような「浅茅」に喩えられる若い女性で、一条北の方はその「あやき」を使者にし、文を付けた「をかしき浅茅」を持たせている。「をかしき浅茅」で表象された「あやき」は、橘千蔭邸の従者の目にとまり、一条北の方の手紙は千蔭に届けられた。このように、「浅茅」は、『萬葉集』では、若い女性が喩えられる風情ある秋の景物であったが、平安時代中期頃になると、蓬や葎などと共に荒廃した邸宅の景物となり、一条北の方のⓐ歌では自身の邸の喩えとして「浅茅繁き」と詠まれている。

次に『うつほ物語』内で浅茅の用例は七例あるが、それらと忠こそ巻との関係を考えたい。

ⓒ虫だにもあまた声せぬ浅茅生にひとり住むらむ人をこそ思へ（①五二頁）

ⓓ秋風の吹くをも嘆く浅茅生にいまはと枯れむをりをこそ思へ（①五七頁）

ⓔ浅茅野に繁る宿には白露のいとどおきなぞ住み憂かりける（①一八五頁）

まずⓒⓓ歌は俊蔭巻で兼雅と俊蔭娘の初めての出逢いと別れの場面の歌にみられる。まだ若小君の兼雅は、賀茂詣の帰途、俊蔭娘の住む荒れた邸に立ち寄る。ⓒ歌は、兼雅が浅茅生の荒れたところに一人で暮らしている俊蔭娘を思い詠んだ独詠歌である。ⓓ歌は、俊蔭娘が兼雅との契りの後、浅茅生に住む自分の将来を不安に思う気持

ちを詠んだ歌で、ⓒ歌に唱和したような歌となっている。俊蔭巻の二人の歌は贈答歌というより、それぞれの独詠歌のようである。二人の歌は浅茅生に荒廃した宿を喩えている点は共通し、俊蔭娘のⓓ歌はさらに、秋風を嘆く浅茅が枯れてしまうように兼雅に忘れ去られる不安が詠まれ、前述した③歌と同様の詠みぶりである。ⓔ歌は藤原の君巻で、滋野真菅の息子帯刀が父の代作であて宮に詠んだ歌である。「おきな」に「置き」と「翁」が掛けられている。一条北の方のⓐ歌と「浅茅」の「繁る宿」が共通し、千蔭のⓑ歌とは「露」「おき」の語が共通しており、同じ物語内の藤原の君巻の歌と影響関係にある。さらに、年老いた真菅のあて宮への恋は、『伊勢物語』六三段の性を入れ替えたパロディーとなっているが、一条北の方も五十歳余りの老女で千蔭とは親子ほどの年齢差があり、『伊勢物語』六三段と同じ設定になっている。

さらに、忠こそ巻には「浅茅」の用例が三例あり、ⓐⓑ歌の贈答場面で二例と、後ほど千蔭が「白銀の透箱二つに、この北の方の御文ども、浅茅つけたりしよりはじめて」（①二四六頁）と返却する場面でみられる。七例めは、国譲中巻のあて宮の若宮が「君がかく取りそめければ山川の浅茅ぞ沖の上に見えける」（③二〇九頁）と奇抜な発想で詠んだ歌にみられる。このように、「浅茅」は、『うつほ物語』内七例中六例が和歌での用例で歌語として用いられ、その内の三例が一条北の方に関わり、忠こそ巻では若き女性を表す「浅茅」が若くはない一条北の方の表象になっている。

二　「葎生ほす宿」

次に、一条北の方のⓐ歌に詠まれた「葎生ほす宿」の意味を考察したい。「葎」は蔓性の雑草の総称である。『古今六帖』には全体で十二首あるが、第六帖の歌題「葎」には六首があり、その中の三首を次に示す。

⑥葎はふいやしき宿も大君の来むと知りせば玉敷かましを（左大臣諸兄）（三八七〇）

⑦何せんに玉の台（うてな）も八重葎出づらん中に二人こそ寝めれぬ（三八七五）

⑧葎生ひて荒れたる宿の恋しきに玉とつくれる宿も忘れぬ（三八七四）

⑥歌は『萬葉集』巻十九（四句「まさむと知らば」左注「左大臣橘卿」）と、『古今六帖』第二帖「みゆき」（四句「みゆきと知らば」作者名「左大臣橘朝臣」）にもあるが、第四句にいずれも異同があり、⑥歌が最も敬意の低い表現である。⑥歌の「葎はふ」は雑草が生い茂って

荒れ果てている所を意味し、この歌は貴人の来訪を光栄とし、接待の不備を詫びる挨拶の歌で、作者が左大臣橘諸兄であることに注目したい。千蔭は右大臣だが同じ橘氏である。ⓐ歌には、⑥歌の作者が意識され、千蔭邸が「葎生ほす宿」と詠まれている。

⑦⑧歌は『古今六帖』のみに見られる歌で、立派な邸の「玉の台」と、葎が生い繁る「葎の宿」が比較され、愛する人と共寝した「葎の宿」の方がよいとされている。⑦歌は、一条北の方の忠こそへの継子いじめが始まる直前の千蔭と忠こその会話の場面に引かれている。

おとど、「『玉の台も』と言ふは、それぞかし」とのたまひて、北の方の御帳の内に御座所して、大殿籠りなどするに、忠こそ「今宵は一条には渡らせたまふまじきにや」と聞こえたまへば、おとど、

ⓕ年経れど忘れぬ人の寝し床ぞ独り臥すにもうれしかりける（①二二一頁）

「玉の台も」には⑦歌が直接引かれ、千蔭を迎えるため贅を尽くした一条北の方邸が「玉の台」とすれば、千蔭邸は「八重葎出づらん中」のようであることを意味し、この場面でも千蔭邸が「葎の宿」とされている。

次に『うつほ物語』内での「葎」の用例は十八例あるが、地の文では「葎の下」「葎の宿」など荒廃した邸を意味する用例が多い。その中でも、荒れ果てた京極邸をも含めて俊蔭娘に関わる用例が七例あるが、千蔭邸は「葎の宿」に喩えられている点で京極邸に通じている。和歌の用例は六例で、同時代以降の歌とともに検討したい。

ⓑ人はいさかれじとぞ思ふ頼め置きて露の消えにし宿の葎は（再掲）

ⓖ松虫の宿訪ふ秋の葎にはやどれる露やものを思はむ（②二二四頁）

⑨わが宿の葎の露も消えなくに松虫の声聞こゆらんかし（『惟成弁集』「松虫」）

ⓐ歌では千蔭邸が「葎生ほす宿」に喩えられていたが、ⓑ歌では千蔭が「葎」に、亡き妻が「露」に喩えられ、「枯れ」に「離れ」が掛けられて、千蔭は愛する妻の亡くなった家を離れまいと詠んでいる。ⓑ歌には「葎の宿」と「露」が一首の中に詠まれているが、そのような例は『うつほ物語』以前には見出せない。内侍のかみ巻のⓖ歌には見られ、「葎」に藤壺、「露」に東宮が喩えられている点でも共通する。⑨歌は、ⓑ歌と言葉の続き具合が共通しているが、寛和二（九八六）年に花山天皇が主催した「内裏歌合」に出詠された歌で、『うつほ物語』の成立下限が一条朝の初期（一条朝は九八六～一〇一一年）と考

えると、[6]前後関係は不明だが、影響関係にあると言えるのではないだろうか。つまり、千蔭のⓑ歌は、「葎の宿」と「露」をともに詠んだ初期の用例となり、忠こそ巻の成立時期とも関わってくる。

千蔭はⓑ歌を、なぜ「長き葎」に文を付けて返したのだろうか。「葎」の長さを詠んだ歌は管見のところ見出せないが、一条北の方が千蔭に贈った「をかしき浅茅」が趣深い「短い茅」を意味するので、それに対して「長き葎」を贈るという「長短」の対を意図した機知的な趣向ではないかと考える。また、橘氏の「橘」の意味する永遠性も長さに影響しているのかもしれない。

このように、互いに趣向をこらしたⓐⓑ歌の贈答が始まりとなって、この後一条北の方は「をかしきこともあはれなることも」手紙や和歌にしたため、千蔭との交流が始まる。忠こそ巻で一条北の方は七首和歌を詠んでいるが、二首の独詠歌を除いて、すべて贈歌であり、その内四首は千蔭に、一首は忠こそに対しての歌である。『うつほ物語』全体でもこれほど贈歌を繰り返す女性は一条北の方のみで、歌を詠み交わすことで千蔭との関係を自ら築こうとしており、歌物語的な展開となっている。

三　「蓬」の不在

平安中期以後、荒れ果てた家を象徴する「草」としては、「蓬」、「浅茅」、「葎」が一般的であるが、この場面に「蓬」が描かれていないのはなぜだろうか。『うつほ物語』全体でも、「蓬」の用例は八例しかない。忠こそ巻でも「蓬」の用例はないが、巻末で一条北の方に最後まで献身的な下仕への名前が「よもぎ」なのは意図的であるように思われる。

ⓗ夏になるままに、出で入りつくろふ人なきところなれば、蓬、葎さへ生ひこりて、人めまれにて、ただ明け暮れながむるに、（①四九頁）

ⓘむかし、屋どもなく倒れ、（中略）丈よりも高かりし草も、蓬が中を分け入りておはして見えたりしに（③五〇一頁）

俊蔭巻において四例見られ、ⓗは俊蔭の娘が住む荒廃した京極邸の庭の描写に用いられている。ⓘは楼の上上巻で、兼雅が俊蔭巻で京極邸を訪れた時の回想が記されている部分である。このように、『うつほ物語』内での「蓬」は、八例中五例が俊蔭娘の住んでいた京極邸の荒廃を表すために用いられ、俊蔭娘との結びつきが強い。

次に、「蓬」の和歌での用例をみる。『古今六帖』全体では四首、「蓬」の歌題でも三首しか掲載されておらず、

「浅茅」や「葎」と比べると少ない。

⑩我も古り蓬も宿に繁りにし門に音する人は誰ぞも（三九五六）

⑪古里となるぞわびしき夏衣蓬の上の露見るごとに（三九五七）

⑫秋風や蓬の宿に吹きぬらん声なつかしく鳴くきりぎりす（三九五八）

三首とも、「蓬」の生い茂る家は、人の訪れのないさびしい宿として詠まれているが、「好忠百首」の序では、「蓬」は「浅茅」や「葎」とは異なる意味で用いられている。

あはれ、たづきありせば、百敷の大宮仕へつとむとて（中略）蓬のかどに閉ぢられて出で仕ふることもなき、（中略）昨日見し宝の宿も今日は浅茅が原と露しげくて、あしたに通ひし玉のとぼそも夕べには八重葎にうづもれて、空ゆく雲のはてもなく、（後略）

この序では、「浅茅が原」と「八重葎」は荒れ果てた邸宅を意味している。だが、「蓬」は「蓬の生い茂る荒れた宿」だけでなく「そこに閉じこもって出仕することもない不遇な貧士の住居」までも意味している。これは、「漢詩にみられるイメージ」[7]に近く、例えば、源順の「五嘆吟」（『扶桑集』）には「単貧久被蓬門閉」（単に貧しくて久しく蓬の門に閉ぢられ）とある。好忠・順の歌と『うつほ物語』の和歌には共通語彙が多いが[8]、忠こそ巻には、「好忠百首」の序にみられたような漢詩のイメージが強い「蓬」はあえて用いないという表現意識があったのかもしれない。

最後に「よもぎ」という名前の侍女が登場することについて、漢詩文では、例えば、『荘子』逍遥遊に「則ち夫子猶ほ蓬の心有るかな」とあり「蓬の心」はこせこせしたまがった心を表しているが、その「よもぎ」は「なめく使ひにくしとて、人よりことに憎みたまひし下仕へ」（①二四九・二五〇頁）であった。「なめく」は礼儀知らずの意であり、漢詩文の用例と意味が通じる。「蓬」は『詩経』では邪気払いの霊的呪力のある植物としても詠まれており、歌語とは異なる意味がある。このように、忠こそ巻には、漢詩のイメージが強い「蓬」は描かれず、「浅茅」や「葎」といった歌語が用いられ、歌物語的な世界が志向されている。

四　「菅原伏見の里」

一条北の方は財を尽くして千蔭の愛情を得ようとしたが、次第に千蔭の足は遠のき、手紙さえもこない日々が

数か月続いて、万策尽き自ら歌を贈る場面を見たい。

「ⓙ菅原や伏見の里を忘るるはわが荒れまくや惜しまざるらむ

と聞こゆれば、さらなりや。いみじき恥をも見たまへつるかな」と恨み聞こえたまへれば、おとど見たまふに、（中略）「今ためらひて。まことや、菅原は、ⓚ荒れまくは君をぞ惜しむ菅原や伏見の里のあまたなければ（①二一九頁）

二人の関係は、基本的に一条北の方の「恥」という言葉に、「情け」ある千蔭が相手の世間体を思って行動に移すことで展開している。[9] だが、この数か月間手紙も書かなかった千蔭が返歌し一条北の方邸を訪れるという行動の変化には、ⓙ歌に何か千蔭を動かす力があったのではないだろうか。さらに、千蔭が「まことや、菅原は」とⓚ歌の前に「菅原」を復唱していることからも「菅原」に何か特別な意味があると考える。

『うつほ物語』以前に「菅原」を含む歌は十首あり、この場面の引歌としては次の二首が指摘されているが、二首とも引歌として認めてよいと考える。

⑬いざここにわが世は経なむ菅原や伏見の里の荒れまくも惜し（『古今集』雑下・九八一）

⑭菅原や伏見の里の荒れしより通ひし人の跡も絶えにき（『後撰集』恋六・一〇二四）

⑬歌は『古今六帖』第二帖「里」にもある。「菅原の伏見」は大和国にあり、垂仁天皇・安康天皇の御陵があり、元明天皇の行幸も行われた古くから重要な土地で、菅原氏の本貫の地としても知られている。そのため、⑬歌は様々な説話と結びつき中世には「菅原の神の歌」として伝承され、[10] また『日本書紀』垂仁紀に記された伝承をふまえて詠まれたのではないかという指摘もある。[11]

九十年の春二月の庚子の朔に、天皇、田道間守に命せて常世国に遣し、非時香菓を求めしめたまふ。今し橘と謂ふは是なり。

田道間守は、垂仁天皇の命により、常世の国に行き、十年後「非時香菓」すなわち「橘」を持ち帰ったが、既に垂仁天皇は崩御し、菅原伏見陵に葬られていた。田道間守は、その前で復命できずに泣いて死んだ。この伝承をふまえて⑬歌が詠まれたと仮定すると、一条北の方のⓙ歌に⑬歌が引かれたのは、植物としての「橘」が橘氏の喩えであることによる。[12] 前述したⓐ歌でも、一条北の方は左大臣橘諸兄が橘氏であることと「葎」との関係性に注目して和歌を詠んでいた。

⑭歌は⑬歌をもとに詠まれている。詞書には「菅原のおほいまうちぎみの家に侍りける女に通ひ侍りける男、

仲絶えてまた訪ひて侍りければ」とあり、この女は、女房とも見られるが、道真の娘とも解釈できる。大和の菅原伏見の里は、菅原氏の本貫のため、「菅原氏の娘の里」の意味を掛け、「荒れし」は「女のいる所が荒れたと見るだけでなく、道真の左遷と結びつける」[13]読みも可能である。⑭歌を一条北の方のⓙ歌が引いているとすれば、道真と同じ右大臣である千蔭の失脚を意図する第二の讒言には、藤原氏が橘氏を含む他氏を排斥した承和の変の影響[14]だけでなく、道真の左遷の影響もあることが暗示されているのかもしれない。

菅原道真が十世紀半ばからは既に神格化されていたことから、成立下限が一条朝初期とされる『うつほ物語』成立の頃には、⑬歌を「菅原の神の歌」とする伝承があった可能性は高い。神歌である⑬歌を引く一条北の方は神の言葉を伝える巫女的な存在とも言え、前述したように千蔭への歌がすべて贈歌で、これは男から女への贈歌が当時一般的であることを考えると特殊である。また、「恥」という語を呪文のように何度も用い、老女から発せられる呪力の持ち主であること[15]も考え合わせると、彼女から発せられるⓙ歌の「菅原」や「恥」といった言葉の力に千蔭は引き寄せられたのかもしれない。

ⓚ歌はⓙ歌が引いた⑬歌の下の句と同じ言葉を用いて詠まれており、千蔭は一条北の方の心に寄り添っている。ⓙⓚ歌に直接引かれていない上の句「いざここにわが世はへなむ」が引歌の意図する内容となる。一条北の方のⓙ歌は、菅原の伏見の里のような私の家を忘れるのは、一生を過ごすつもりがない私の家の荒れることが惜しくないのだろう、と詠まれている。それに対して千蔭は、一生を過ごす愛情はないがこのままにはしておけないと一条北の方邸を訪れることにし、ⓚ歌で通い所はあなたの所だけなのであなたの心が荒れることを惜しむと詠んでいる。また、⑭歌が引かれていると考えると、⑭歌の下の句「通ひし人の跡も絶えにき」が一条北の方の心情を表し、「伏見」と「臥し身」の掛詞も共通している。

このように、「菅原」の詠まれた⑬歌は、千蔭の橘氏を連想させる「橘」の喩えに関係し、菅原の神の歌ともされ、その歌を引いた一条北の方の歌には千蔭を動かす十分な力があり、この場面の展開も歌物語的である。

五　歌語の連想による和歌の展開

忠こそ巻に詠まれた和歌を順に並べてみると、その和歌は歌語の発想のもとにゆるやかに連続して詠まれていることがわかる。[16]

①ここのみや浅茅繁きと思へどもまた 葎生ほす宿 も

ありとか

②人はいさかれじとぞ思ふ頼め置きて露の消えにし宿の葎は

③菅原や伏見の里を忘るるはわが荒れまくや惜しまざるらむ

④荒れまくは君をぞ惜しむ菅原や伏見の里のあまたなければ

⑤年経れど忘れぬ人の寝し床ぞ独り臥すにもうれしかりける

⑥寝し人も涙の上に臥すものを宿の下には数も書くらむ

⑦今日だにも生ふと知らなむ菖蒲草涙の川の深き汀に

⑧寄る波のすすぎわたれば菖蒲草なほ思ふこそ苦しかりけれ

⑨弾く人もむなしくならば琴の音も空蟬のみや今は調べむ

⑩泣き溜むる涙の川の水深みあひ見でほどの淀むべきかな

⑪涙川底なる水の速ければ滝つ瀬見むと思はざりしを

⑫思ひ出でてふみ見るごとに水無瀬川つらき瀬のみぞあまた見えける

⑬浅きこそふみも見るらめ水無瀬川深き淵にぞ我は沈める

⑭白波の真砂子をすすぐ田子の浦に遅れてなぞも嘆く船人

⑮暇もなく波懸かるてふ田子の浦に寄すなる名をや形見にはせむ

⑯駿河なる浦ならねども白波は田子といふ名にも立ち返りけり

⑰待つ人の袖かと見れば花薄身のあき風になびくなりけり

⑱わが宿に時々吹きしあき風のいとどあらしになるがあやしさ

⑲あき来とも木草の色し変はらずは風のとどまる花もありなむ

⑳白露に色変はりゆく秋萩は玉まく葛もかひなかりけり

①②歌の贈答は、前述したように、一条北の方邸が「浅茅繁き」宿、橘千蔭邸が「橘」氏に関連する「葎生ほす宿」と喩えられている。③④歌の贈答は、①②歌の荒れた宿を表す「浅茅」「葎」と同様に、『古今六帖』の第六帖「草」部に属する「菅（すげ）」から荒れた「菅原」

が連想されている。例えば、『古事記』下巻の仁徳天皇には「八田の一本菅（すげ）は子持たず立ちか荒れなむ、あたら菅（すが）原」の歌があり、一条北の方も子はなかったが、子を持たず「立ち荒れ」（立ち枯れ）た「菅原」が惜しいと詠まれている。

⑤⑥歌は、千蔭と忠こその贈答で、③④歌で詠まれた「菅原や伏見の里」の「伏見」の掛詞「臥し身」から「臥す」が連想されて詠まれている。⑦歌は、⑥歌で詠まれた「涙」から「涙の川」が連想されて詠まれ、一条北の方から忠こそへの贈歌である。

忠こその⑧歌は、⑦歌と「菖蒲草」が共通の素材として詠まれ、忠こその生まれた五月五日の節会では、「菖蒲草」の「根」を「引く」根合が行われた。例えば、『古今六帖』第一帖の歌題「菖蒲草」にある「五月雨の玉に貫く日の菖蒲草ねにあらはれて泣きぬべらなり（一〇一）」では「五月雨の玉に貫く日の菖蒲草」までが「ね」を導く序詞で、「根」が「音（ね）」に転じて「泣く」を導き出している。忠こそ巻でも、⑧歌の「菖蒲草」からその「ね（根）をひ（引）く」が連想され、忠こその独詠歌⑨は、「根」が「音（ね）」に転じて、琴の「音（ね）」を「弾く」と詠まれている。

⑨歌に詠まれた「空蟬」は、「音鳴く」蟬として歌に詠まれるが、例えば、「うちはへて音（ね）を鳴きくらす空蟬のむなしき恋も我はするかな」（『後撰集』夏・一九二）のように「人が泣く」ことが掛けられる。⑨歌から⑩歌については、まず⑨歌「空蟬」から「なく（鳴く／泣く）」が連想され、次に「人が泣く」ことで流れ出る「涙」から⑩歌の「涙の川」が連想されている。

⑩歌と⑪歌は、「涙の川」が共通し、忠こそと梅壺の女御との贈答歌である。⑪歌で新たに詠まれた「瀬」が次の⑫歌に詠まれ、⑬歌は⑫歌と「水無瀬川」が共通し、「瀬」と対になる「淵」が詠まれている。

⑬歌の「ふち（淵）」から「ふぢ（藤）」が連想され、「たこの浦」へとつながっている。例えば、『古今六帖』第六帖の「藤」には、「たこの浦の底さへ匂ふ藤波をかざして行かん見ぬ人のため（四二三九）」という歌がある。この歌は、『萬葉集』巻十九や、『拾遺集』夏にも見える歌でそれらの詞書から実際の「たこの浦」は越中にあるが、『古今六帖』には詞書がないため「田子の浦」と連想したのだろう。あるいは、仮名表記は異なるものの「ふち（淵）」から「ふじ（冨士）」への連想で駿河にある「田子の浦」が詠まれたのかもしれない[17]。さらに、「藤波」と言う歌語は、藤の花がなびいて動く様子が「波」に似ていることによるが、歌によく詠まれ[18]、「藤波」か

ら⑭歌の「波」への連想になったとも考えられる。

⑭⑮⑯歌は、千蔭とその従者たちの唱和歌で、忠こその失踪を嘆く歌が『古今集』恋一の「駿河なる田子の浦波立たぬ日はあれども君を恋ひぬ日はなし（四八九）」を引歌として詠まれている。その三首に共通して詠まれた「なみ（波）」は、濡れる「袖」とともに和歌に詠まれることが多く、次の⑰歌には「待つ人の袖」が詠まれている。例えば、『後撰集』恋一の「いつしかとわが松山に今はとて越ゆなる波に濡るる袖かな（五二二）」には、「波に濡るる袖」と詠まれ、さらに、この「松山」には「待つ」が掛けられている。また、千蔭の⑭歌に詠まれた上の句「白波の真砂子をすすぐ」は、忠こその⑧歌の上の句「寄る波のすすぎわたれば」からの連想もあるように思われる。

⑰⑱⑲歌は「秋風」が共通している。⑲歌と⑳歌は「秋」が共通し、千蔭の⑲歌では「木草の色変はらずは」と秋が来ても木草の色が変わらなかったらと反実仮想で詠まれており、その⑲歌を受けて詠まれた⑳の一条北の方の最後の独詠歌は、「白露に色変はりゆく秋萩」と詠んで現実を見据えている。

このように、忠こそ巻は別々の場面の和歌が、歌語の連想によって連続して詠まれているが、それは『大和物語』の各段が言葉の連想によって配列されていることに類似しており、[19] 歌物語の方法が意識されている。

六　『古今六帖』の歌題による発想

一条北の方の最後の独詠歌である⑳歌には、『古今六帖』第四帖の歌題「ないがしろ」の歌が引かれていた。この歌題の「ないがしろ」は、相手の思いを無視するという意味で、相手の求婚を拒否する、または、逆に相手に求愛を忌避された歌が収められている。歌題「ないがしろ」には七首の歌が並んでいるが、その中の四首を示す。

㋐秋萩の玉まく葛のうるさうるさ我をな恋ひそあひも思はず（二一一二三）

㋑今はとて人のかれはて浅茅生にさればなづなの花ぞ咲きける（二一一二七）

㋒五月雨に乱れやはせじ菖蒲草あやなし今は思ひ忘れぬ（躬恒）（二一一二八）

㋓吉野川よしのかはれよさもあらばあれ瀬になる淵はなくこそあらめ（二一一二九）

⑳歌には、㋐歌が引かれているが、『古今六帖』にだけみられる歌で、第五帖の歌題「あひ思はぬ」にも重出している。一条北の方の立場に立てば、千蔭にうるさく

言い寄って拒絶されたことを意味し、一条北の方の最終詠の引歌としてふさわしい歌と言える。⑳歌は秋も深まり白露に色が変わっていく秋萩には、玉のように巻き付く葛の若葉も何にもならない、すなわち、心変わりした千蔭をどんなに思っても仕方がないという意味になる。「秋萩」に千蔭、若葉を表す「玉まく葛」に一条北の方が喩えられている。前述した「浅茅」も若い女性の喩えであったが、年老いても色を好む一条北の方には若さを示す植物がふさわしいと意識して用いられている。

また、⑳歌に「秋萩」と「葛」が詠まれたのは、前述した『古今六帖』第六帖「浅茅」にある、三九〇四番歌「秋萩は咲きぬべからし我が宿の浅茅が花の色づくみれば」が関係している。この歌には「浅茅」の花が色づくと、「秋萩」が咲き始めると詠まれ、次の三九〇五番歌の上の句は「真葛はふ小野の浅茅を」で⑳歌の「玉まく葛」とも関係している。このように、忠こそ巻は一条北の方を表象する「浅茅」の詠まれた①歌に始まり、「秋萩」「葛」の詠まれた⑳歌で終わり、それは、『古今六帖』の歌題「浅茅」に並ぶ歌の連なりが最後まで影響していることを意味する。

さらに、歌題「ないがしろ」の㋑歌は、①歌（五の歌番号、以下同じ）と一条北の方を表象する「浅茅」が共通し、②歌の「人はいさかれはて」とも「人のかれはて」が重なっている。㋒歌の「菖蒲草」は、⑦⑧歌の贈答で詠まれ、㋓歌の「淵」と「瀬」は⑪歌から⑬歌で詠まれていた。このように、忠こそ巻は、歌題「ないがしろ」にある歌の内容や歌語と共通する歌が多く、物語内の和歌を詠む発想の源泉として『古今六帖』が用いられている。

おわりに

忠こそ巻の和歌表現は、『古今六帖』の中で『万葉集』にも出典のある和歌の影響がみられる。「浅茅」は若い女性の喩えとして用いられ、「葎」には「橘氏」との関連があった。「蓬」は漢詩のイメージが強いため意識的に用いられず、「菅原伏見の里」はその引歌の背景にある伝承から、「橘」との関連性があり神歌でもあった。一条北の方が歌を千蔭に贈ることで物語が展開するという点で歌物語的であり、また、忠こそ巻全体の和歌が歌語の発想によりゆるやかに連続して詠まれているという点でも歌物語が意識されている。さらに『古今六帖』の歌題「浅茅」内の歌の連なりや、「ないがしろ」にある歌から発想を得て和歌が詠まれていた。この表現方法は、『源氏物語』にも引き継がれ、新たな表現の展開を

見せることになる。[20]

今回は忠こそ巻について『古今六帖』との関わりを中心に和歌表現を検討したが、今後は『うつほ物語』全体との関わりについても検討していきたい。

＊本文について、『うつほ物語』『日本書紀』は新編日本古典文学全集、『荘子』は新釈漢文大系、『扶桑集』は『源順漢詩文集（私家版）』（佐藤信一・正道寺康子、二〇〇三年）による。和歌と歌番号は新編国歌大観による。表記は私的に改めたところがある。

注

（1）大井田晴彦「忠こそ物語の位相―仲忠との出逢い―」（『うつほ物語の世界』風間書房、二〇〇二年）

（2）本宮洋幸「忠こそ物語の表裏―継母による第二の讒言と承和の変―」（『うつほ物語の長編力』新典社、二〇一九年）

（3）拙稿「『伊勢物語』六十三段と仏教思想―『万葉集』「みやびを」問答の受容と『うつほ物語』一条北の方物語への影響を通して―」（『金城学院大学論集（人文科学編）』第一八巻第二号、二〇二二年三月）

（4）藪葉子『『源氏物語』引歌の生成―『古今和歌六帖』との関わりを中心に』（笠間書院、二〇一七年）

（5）高橋亨「うつほ物語の引き歌と古今六帖」（『源氏物語の詩学　かな物語の生成と心的遠近法』名古屋大学出版会、二〇〇七年）

（6）中野幸一校注・訳『うつほ物語③』解説（小学館、二〇〇二年）

（7）川村晃生・金子英世『『曾禰好忠集』注解』（三弥井書店、二〇一二年）の「好忠百首序」の語釈による。

（8）拙稿「『うつほ物語』の和歌における表現の方法―好忠・順歌との共通語彙を中心に―」（『名古屋大学国語国文学』一〇五、二〇一二年十一月）

（9）注（3）に同じ。

（10）片桐洋一『歌枕歌ことば辞典増訂版』（笠間書院、一九九九年）。また『毘沙門堂本古今集注』には「一説には、北野天神の垂迹以前の御歌也。」とある。

（11）小島憲之・新井栄蔵校注『古今和歌集』（岩波書店、一九八九年）の脚注。

（12）注（1）に同じ。

（13）片桐洋一校注『後撰和歌集』（岩波書店、一九九〇年）の脚注。

（14）注（2）に同じ。

（15）大井田晴彦「一条北の方の造型―『うつほ物語』作中人物覚書―」（『物語研究会会報』26号、一九九五年八月）

（16）忠こそ巻の歌に改めて①から順に番号を付している。
（17）例えば、『古今集』雑歌下の「わが庵は都の辰巳しかぞ住む世をうぢ山と人はいふなり（九八三）」についても、「うぢ（宇治）」と「うし（憂し）」の掛詞が認められる。
（18）注（10）の片桐洋一氏の書に同じ。
（19）中島和歌子「言葉の綴れ錦としての『大和物語』―九四段～九六段を中心に―」（『古代中世和歌文学の研究』和泉書院、二〇〇三年）
（20）注（4）に同じ。

（ないとう・えいこ／愛知淑徳大学非常勤講師）